

かたりべ101

豊島区立郷土資料館だより



幕舞 1996年5月12日撮影 日が落ちてあたりが薄暗くなる頃行われる。獅子が、布を網状にしたものからみついて舞う。あたりに笛の音が心地よく響く。



壺獅子 1996年製作。500g。48×22×19cm。
木綿の紐をあごにまわして被る。

長崎獅子舞の禮古は藁で作った獅子頭で

毎年五月第二の日曜日に獅子舞が行われています。その場所は、西武池袋線椎名町駅を下車してまもなくのところにある長崎神社とその周辺の地域です。この獅子舞は、そのあたり一帯が農村であったときから、五穀豊稔と悪疫退散を祈るために行われ、現在でも、毎年多くの見学者でにぎわいをみせています。長崎神社境内のモガリ（笹竹で囲まれた空間）で舞い、また、地域を巡ります。この獅子舞の獅子が舞っておこす風に当たると「風邪をひかない」ともいわれているようです。江戸時代の元禄年間から始まったともいわれる獅子舞ですが、時代によりできなかつたことや変更したことがあったようです。例えば、旧暦四月一三日の祭日は、五月の第二日曜日になりました。また、一九六〇年代には、モガリの四隅にいる花笠の子ども（当時は男の子が担当）四人が揃わず、やむをえず年長の男性が花笠を手にとって巡ったこともあったようです。

ところで、獅子舞の演目に花舞があります。これは、獅子頭をつけた男性の舞手が一時間は舞い続けるものです。また、幕舞という演目もあります。これは、獅子頭と衣装を身に付けた舞手が、モガリのなかで荒れ狂う所作をする勇壮な舞です。これらの舞を舞うためには相当な体力が必要で、男性の二〇歳代までが限界ということを、かつての舞手の方から聞いたことがあります。

最初から、誰もが重い獅子頭をつけて舞うことができると言うわけではありません。そのため、大人が稲藁を使って練習用の獅子頭を作ったと伝えられています。今、水田はありません。そして、稲藁で獅子頭を作った経験者はいらっしやるでしょうか。

写真は、一九一〇年代の稲藁の獅子頭を見て、新しい獅子頭を作ることを試みた栗田文字氏（藁算・結び紐の研究者）によるものです。同氏によれば、復元が最も難しかったところは、鼻の部分ということでした。その部分は、長崎のナスとして近隣に名高い、そのナスの苗床の一部分の作り方でした。

（福岡）

かたりべ99号の「地誌・絵図にみる大根」に引き続き、今回は明治時代以降の大根と種子の生産についてみていきます。

■大根と干大根

明治時代以降も、大根（蘿蔔）は区内のほぼ全域で生産され、主要な特産物の一つでした。明治五年（一八七二）の『東京府志料』をみると、長崎村五〇万本七五〇円を筆頭に、池袋村二五〇〇荷三七五円、雑司ヶ谷村一五〇〇荷二二〇円、高田村二二〇〇荷二六八円、新田堀之内村七万八千本（九二・六円）が生産され、特に長崎村は、土支田村（練馬区）、前野村（板橋区）などに次ぐ東京府内第六位の大根生産地でした。

注目されるのが、池袋村では、乾大根一三〇〇荷（三九〇円）と沢庵漬六〇〇樽（三六〇円）が、生大根の二倍の生産額があったことです。乾（干）大根は沢庵漬の材料として売られますが、沢庵漬では、下練馬村一八〇〇樽（九〇〇円）、上練馬村一五〇〇樽（七五〇円）に次いで、府内第三位を占め、沢庵漬の主要産地だったことがわかります。

明治三〇年代後半になると、区内の主

産地は長崎村に移ります。『北豊島郡農業志料』（明治三六年）の「長崎村 大根」の項に、「生大根、干大根ノ二種ヲ栽培スト雖モ、産物トシテ最多額ヲ産スルモノヲ干大根トシ、起因ハ練馬大根ノ種子ヲ播施セシヨリナラン、現時進ンテ栽培増加モ、多クハ沢庵漬トシテ各地ニ販売スルモノ極メテ巨大ナリ、其漬方ノ如キモ年々改良ヲ加ヘテ将来有望ノ状況ナリ、肥料ハ堆肥及人糞、干鰯、糠等ヲ用ユ」とあり、当時は沢庵漬用の干大根が主流だったことがわかります。

収穫した大根は、谷端川沿いの洗い場や洗い桶（ダイコダライ）できれいに洗った後、約一〇本ずつ縄で編み、丸太で組んだ矢来にかけて一〜二週間干します。初冬の畑に、白一色の干大根が広がっている光景は壮観だったでしょう。

■博覧会に出品された大根種子

区内では、大根種子も多く生産されていました。明治五年の統計には、果鴨村で一〇石（一〇〇円）、池袋村で七石五斗（七五円）の大根種子の産出がみられ、両村は大根種子の産地でもありました。とくに池袋村は「秋つまり大根」の採種

地として知られていました。この品種は、白首の円筒形で尻が丸く止り、水分が多く、主に煮食に用いられたようです。

明治一〇年・一四年・二三年の内国勸

業博覧会には、果鴨村から紫大根（冬のほか、練馬長留・宮重・九日・徳利・守口・三月大根の種子が、雑司ヶ谷村から尾張・桜島大根の種子が出品されています。明治四〇年の東京勸業博覧会では、果鴨村の榎本留吉が細根大根（糞状）を出品し、東京大正博覧会（大正三年）には、果鴨村の中田金三郎のほか、果鴨村堀之内の戸部銀次郎が東京本場秋止り・黒葉美濃丸・大長丸尻・晩夏大根・二年（子）三月大根、果鴨村の小宮幸多郎が白首無時大根（糞状）、同村の小宮幸多郎が秋留り大根・秋晩大根、同村の榎本留吉が晩夏大根の種子を出品しています。

中田家・戸部家・榎本家は、当時種苗業を営んでいました。

■大根種子の販売

中山道沿いの榎本留吉商店（現東京種苗）は、幕末から野菜種子を扱う老舗の種子問屋として有名でした。明治中期以降、都市化の進行と事業の拡大により、

練馬・みの早生・理想・時無・聖護院・宮重大根など約二〇品種の種子を、東京・千葉・埼玉・茨城県内の農家に委託採種し、全国各地に販売しました。

現在、大根といえば青首大根が主流になっていますが、以前は地域の気候風土に適した数多くの品種が作られていたことがわかります。近年、伝統野菜が再び注目を集め、在来品種の復活などの取り組みが各地でみられるようになっていきます。時代は変わっても、大根は私たちの食生活に最も身近な野菜であることに変わりはないでしょう。

（横山）



長崎村の大根洗い 田島憲氏提供

Q 江戸時代の絵図を見たら、高田一丁目の南蔵院そばに「御殿」と書いてありました。この「御殿」とは何でしょうか？（質問者 ままこ）

A ここて言う「御殿」とは「将軍や大名の宿泊、休憩施設に当り、「高田御殿」と呼ばれていました。以下詳しく解説しましょう。

質問に出てくる南蔵院は、豊島区高田一―九一―に所在する永和三年（一三七六）に没した田成比丘によって開かれた真言宗豊山派の寺院です。

「御殿」については、『新編武蔵風土記稿』の「下高田村」の項目に興味深い記述がありますので、以下紹介します。

南蔵院（前略）大橋龍慶仏道帰依の余りしばらく当寺に寄寓しければ、大猷院此辺御遊獵の時しはくならずせられ御殿など御営造ありしとなり（中略）

御茶屋蹟 御茶屋は大猷院御遊獵の時休息所として造せられし所なり、正保の国図にも載たり、其後廃せられ元禄七年細井九右衛門奉りて除地となし、當時の境内に入れり、今御殿跡と称す（後略）

これによると、大橋龍慶という者が出家してからしばらくの間、南蔵院に仮住まいをしており、この頃に大猷院（三代将軍徳川家光が鷹狩りの際によく立ち寄ったので、「御殿」などを造ったとあります。

大橋龍慶とは将軍秀忠・家光の二代にわたって、右筆（書記役）を務めた人物です。出家してからも家光とは一時期交流がありました。南蔵院に「御殿」の造営があったとありますが、これはおそらく龍慶が家光をもてなす場所として造られたものではないかと考えられます。

御茶屋も家光が鷹狩りに来た際に寄る休憩所として造られた施設です。幕府によって作成された「正保国図」にも「御茶屋」と記載されています。その後「御殿」は廃止され、元禄七年（一六九四）、代官細井九右衛門の管轄する除地（税金が特別に免除された土地）となり、今の南蔵院の土地になりました。その跡地は「御殿跡」と呼ばれていました。このことが分かる絵図に寛永一九年（一六四二）に作成されたと考えられている「寛永江戸全図」があります。そこには南蔵院の近くに四角に囲まれた場所が書いてあり、

「高田御殿」と記されています。これは、現在南蔵院の近くにある会社の土地の一部になっています。

また、家光が数度訪れた「御殿」は当時、敷の中にあったとされています。「江戸名所図会」の「高田・南蔵院・鷹宿梅・氷川社・右橋」の挿絵（下図参照）には、ちょうど薬師堂が配置されているあたりに木々が覆われている様子が描かれています。もちろん、この挿絵のみで「御殿」の跡地と断定することはできませんが、そうした見方も出来るでしょう。

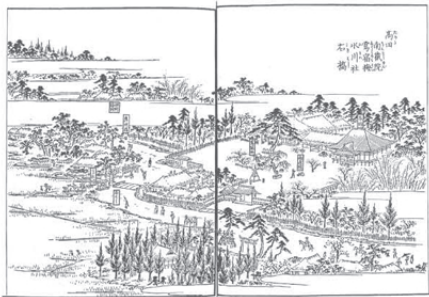
さて、家光の鷹狩りは、江戸近郊を中心に盛んに行われていました。将軍在位中、二二八回も豊島区内に鷹狩りのために訪れていますが、その内、高田方面へは一三三回訪れていることが分かっています。これは寛永一三年（一六三六）に高田馬場が開設された時期と関係していることが指摘されています。

なお、「高田御殿」と呼ばれる場所が実はもう一つありました。今の護国寺境内（文京区大塚）に当たりますが、天和元年（一六八二）に護国寺が建立される以前は幕府の菜園でした。ここにも家光が鷹狩りのためよく立ち寄っていたこと

から「御殿」があり、「高田御殿」と称されたと言います。

江戸時代の絵図で見ると、「高田御殿」は現在の南蔵院付近にあったと考えられるのが妥当かと思われませんが、同時期に複数箇所存在した可能性も否定できず、より突っ込んだ考察が必要です。その手がかりを得るためにも、「江戸名所図会」所収「高田・南蔵院・鷹宿梅・氷川社・右橋」に描かれる現在地をふらりと散策してみるのもよいかもしれません。

（酒井）



郷土資料館からのお知らせ

★「豊島区地域地図」第四集「東京近傍
（二分一地形図）」改訂版 発売中！

一九九一年に刊行した第4集が、しばらく在庫切れでしたが、ご要望の声にお応えしてこのたび改訂版を作成しました。明治四二年、大正五年、一〇年、昭和七年、一二年、一三年、三三年発行の一万分一地形図七枚と、解説パンフレットがセットになっています。豊島区全域が一枚に収められていますので、近郊農村から副都心へと急激な変貌をとげた区内の様子が目でわかります。これからの季節、地形図を片手にまち歩きを楽しみませんか。

◆価格九〇〇円（A4判、箱入り）

★「春の収蔵資料展」一部展示替えのお知らせ

■戦時下の暮らしと4・13空襲

一九四五年四月一三日の深夜から一日未明にかけて、約三五〇機のB二九爆撃機により大量の焼夷弾・爆弾が投下されました。この空襲は、豊島区の約七割の部分焼きつくしたほか、現在の北区・板橋区・文京区・新宿区などに大きな被害をもたらしました。このコーナーでは、空襲直後に撮影された豊島区内の写真や、戦時中に使用した生活道具などを展示します。

（四月一日から六月二日までの会期となります）

資料館の法則 学芸プロ 28



区民のための

博物館用語の基礎知識

ワークショップ〈英:workshop〉

博物館、美術館などが実施する体験学習を伴う講座や教室のこと。展示資料や作品などを用いて実技や実験を行い、学習することを目的としている。企業研修や住民参加型まちづくりでの合意形成の手法としても用いられており、様々な場面で使用される用語である。

▽用例△

学芸員A「昔の蓄音器を展示しても、今の子どもたちになんか伝わらないんじゃないかな？」

学芸員B「じゃあ、子ども向けに蓄音機でS P盤のレコードを聴くワークショップを開催しようよ！」

学芸員A「オー、グッドアイデア！」

編集後記

三月に入ってから低温続きで、ソメイヨシノの開花が平年より遅れるかも知れないとのこと。豊島区内はもちろん、全国各地で行われる「桜祭り」主催者にとっては、気がでない日々が続きます。

前号の創刊一〇〇号記念号の発刊後、数名の方からねぎらいのお言葉や励ましのお便りをいただきました。読者の方々からのありがたい声援を受けつつ、今号からは再び通常号に戻ります。

とは言うものの、最後は一〇〇号にならって謎かけで締めましょう。

郷土資料館とかけまして、

健康的にお酒を飲むと解く、

その心は、休館（肝）日があります。

おお末でした...。

（秋山）

かたりべ
No.101

2011年3月30日

豊島区立郷土資料館

東京都豊島区西池袋2-37-4
豊島区立勤労福祉会館7階

電話 03-3980-2351

URL: <http://www.city.toshima.lg.jp/bunka/shiryokan/>